

# 東日本大震災被災者支援活動の試み - ほっとひろば西九大・経過報告（第1報） -

池田 久剛・長野 恵子・高尾 兼利・古賀 靖之・西村 喜文

（西九州大学大学院 健康福祉学研究科）

（平成23年11月14日受理）

## Support Activities for Victims of the Great Eastern Japan Earthquake

Hisataka IKEDA, Keiko NAGANO, Kanetoshi TAKAO, Yasuyuki KOGA and Yoshihumi NISHIMURA

*Graduate School of Health and Social Welfare, Nishikyushu University*

（Accepted: November 14 , 2011）

### Abstract

After the Great Eastern Japan Earthquake on March 11, 2011, many survivors moved to Saga Prefecture. This paper describes supportive psychotherapeutic activities for earthquake victims in Saga. At the initiation of the activities in June 2011, one family participated. Over time, the number of participants increased; by the end of October 2011, six families (17 people) had joined. The participants were divided into two groups: children and parents. The parent group activities were facilitated by the authors (clinical psychologists), while student volunteers simultaneously led the children's activities in the same room. The present paper aims to clarify the processes surrounding these activities for the 5-month period between June and October 2011 and discusses several factors, including staff roles, that promote the continuation of the activities. This discussion is based on the following viewpoints: 1) the activity led by clinical psychologists; 2) the children's group activity; 3) the student volunteers; and 4) the role of management staff.

キーワード：東日本大震災、被災者支援、臨床心理的地域援助

Key words : Great Eastern Japan Earthquake, disaster-victim support, community-based clinical psychological support

## 1. はじめに

平成23年3月11日、東日本を未曾有の大地震および大津波が襲った。甚大な被害を受けその後、多くの被災者が日本全国に生活の場を移した。

佐賀県においても被災者の受け入れの準備をすすめ、多くの被災者が移り住んでいる。

この非常事態に呼応し、福岡県の九州大学より、臨床心理士養成指定大学院においても、何らかの社会的貢献ができないかとの呼びかけがあった<sup>1)</sup>。先行する九州大学に追随する形で、西九州大学においても、「ほっとひろば西九大」の開催を検討し、6月より、実施するに至った。

開催当初から少人数ではあったがコンスタントに利用者があり、その数も次第に増え、被災者からのニーズと期待を感じた。

本活動はまだ継続中であるが、これまでの経過を振り返り、今後の課題や、臨床心理士を中心とした社会活動のあり方について考察する。

## 2. 準備

### 1) 開催方針

ほっとひろば西九大発足にあたり、理念や方向性を検討するため、臨床心理コース教員全員で協議した。その一環として、佐賀県庁と連携し、被災状況に関するデータを入手した（これらの活動に関しては複数の教員で役割を分担して行ったが、以下一括して「教員」と述べる）。

総務省の「避難者情報システム」に基づき、平成23年5月11日現在で佐賀県が市町から報告を受けた人数は、124名であった。うち、就学前児童が39名、小学生18名で、0歳から11歳までの児童の割合が約46%であった。

このような実態から、被災者の多くは子どもの健康被害や、就学などに対する不安を抱え、母子で避難しているケースが多いのではないだろうかと予測した。

このような予測を元に、

- ①就学前児童であっても安心して連れてこられる場
- ②児童の様子を見ながらも、保護者（特に母親）同志が安心してくつろぎ、会話を楽しめる、サロニックな場
- ③ただし、あくまで被災者同士の交流を主目的とし、セラピーがメインではない
- ④ただし、個人的な相談やセラピーのニーズがあれば、実情に応じて対応を考える

等の方針を教員間で共有し、この方針を実現できるような環境の設定について具体的に検討を重ねた。

### 2) 時間と場所

時間帯は、教員の授業等に影響が出にくいよう、また後に述べる学生ボランティアも招集しやすいよう、毎週土曜日の10:30~12:00と設定した。

場所については、西九州大学大学院のある神埼キャンパスは、市街地からのアクセスがよくないため、市街地にほど近い、神園キャンパスの利用を検討した。

神園キャンパスには西九州大学子ども学部があり、西九州大学臨床心理相談室の分室である子育て支援室もある。これらのことから1)の方針にも叶うため、神園キャンパスの教室を借用することとした。

### 3) 広報について

ほっとひろば開催に関する広報については、県・市の支援チームとも連携した。案内チラシについては、利用者にできるだけ安心感を持って参加してもらえよう様々な工夫や配慮を施した。

また、県から新聞・放送関係にも連絡をしていただき、取材もあり、新聞・放送を通した広報も実施していただいた。

### 4) 学生ボランティアについて

1)であげたように、中心となるのは被災してきた大人同士がくつろげる居場所の提供であり、その活動の運営は教員を中心として展開をしていく予定であったが、さらに、

- ①事前準備
- ②当日の誘導
- ③会場設営・撤去など
- ④幼児・児童に対する託児的な関わり

などの業務が、活動を維持するためには必要であった。そのためには、多数の学生ボランティアを必要とした。一回一回の開催での人員を確保することはもちろん、活動を毎週継続する場合の負担を考えると、学生生活に支障を来さないように適宜交代できるよう、一人でも多い協力学生を確保することが必要であった。

しかし、臨床心理コース大学院の学生だけでは、週末には他の臨床活動や、実習等も計画されていた事情もあり、多くの人員が望めなかったため、特に当初は、西九州大学健康福祉学部社会福祉学科の学生を中心に呼びかけた。しかし、被災者に対する支援の性質を考え、ボランティア学生の選抜は、慎重にすすめた。

社会福祉学科の学生は在学中に、社会福祉士の国家試験受験資格取得のため、多くが福祉施設等の学外実習を体験する。それに伴い、丁寧な実習の事前・事後指導やボランティアの体験を重ねている。このような体験と学びから、今回の活動に関しては即戦力として期待することができた。

さらに、授業等を通して、被災者の状況の確認や、どのような点に気をつけることが必要か、折に触れ注意を促し、

安心できる (Safe)

居心地のよい (Comfortable)

居場所 (Space)

を提供することを、学生ボランティアの役割として共通認識を促した。

### 5) 裏方について

神埼キャンパスのプレイルームから持ち出す玩具の選択、準備、その他の物品も含めた移動や、書類・記録の管理・整理、また当日の全体の把握や学部生への指示、会場設営から始まり、保護者グループへのお茶出しや、子どもたちへのおやつと飲み物の提供、帰りのお土産作り、などについては、修士課程修了生が多くを担った。修了生が自発的な気づきや活動を、大学院生や学部生に伝え、院生や学部生も活動の流れや介入のポイントを把握していった。活動の中で司令塔の役割を果たしており、活動に伴う業務の中で役割のはっきりしない曖昧な部分や、活動と活動のつなぎ目のような業務については、ほとんどをこの裏方が担っている。

## 3. 経過

(以下敬称略、掲載順に、参加者はA～、教員はa～と記す)

以上のような準備を整え、平成23年6月4日、第1回目のほっとひろば西九大を開催した。

初回のほっとひろば西九大を開催するに当たって、最初の印象が参加者のその後の動向を左右するとの予想から、一人でも二人でも参加される方があれば、その方に安心・満足していただけるよう、特に1～2回目は細心の注意を払う心がけた。

初回時は2組の事前申し込みがあった。

うち1組は、被災者ではなかったが、宮城県出身で佐賀に来て、震災後佐賀県内で宮城県人会を結成して活動しているAであった。直接の被災者ではないということで受入について事前に検討したが、とりあえず初回参加してもらい話を聞いた上で、判断をすることとした。

もう1組は、小学生2人を連れて被災して来たBであった。

Bのニーズとしては、心理的な支援というよりはむしろ、被災者同士が情報交換できる場がほしいとのことであった。その後の申し込みを含め10月29日(21回)までの参加者のプロフィールを表1に示す。

#1～#2(6月4日、11日)

最初の2回のセッションは、A、Bの2組の参加者で行われた。

大人グループのテーブルと、子どもたちが遊べるスペースを一つの教室内に設定し、大人は話をしつつ子どもたちの様子も必要に応じて観察できるような環境設定を行った。大人グループにファシリテーターとして教員a、子どもグループは、原則として、子ども1人を学生ボランティア2人で担当した。学生の関わりをその外側から見守る役割として、教員bを配置した。

Bが同伴した小学生2人の男児は、自然な感じで学生ボランティアと溶け込み話したり遊んだりし始めた。

また大人グループではBより、避難してきて以来の行政等に対する不満等が語られた。一方で、Bの夫の職業など、同じ被災者であっても微妙な立場の違いで、必ずしも被災者とひとくくりにはできない悩みが語られた。

また#2の後半、兄弟2人の些細な衝突が見られ、兄弟2人の詳細な心理・発達の背景はわからないものの、被災の影響により情緒的に不安定になっているのではないかということが疑われた。

またAに関しては、宮城県人会以外にも多くの社会的

表1 参加者のプロフィール(10月31日現在)

参加者	佐賀への避難人数(うち、ほっとひろば参加人数)		それ以外の参加	初回参加日時	参加に至った経路
	大人	子ども			
A				6月4日	新聞
B	1(1)	2(2)	小6男児 小4男児	2(夫、姪)	6月4日 新聞
C	1(1)	1(1)	4歳女児	2(夫、姑)	6月18日 佐賀市からのDM
D	1(1)	1(1)	2歳女児	0	9月17日 チラシ
E	1(1)	2(0)	高校女児 小6女児	0	9月17日 Aの紹介
F	1(1)	1(0)	小5女児	0	9月17日 Aの紹介
G	1(1)	2(2)	3歳女児 1歳女児	0	10月8日 チラシ・Dの紹介

な活動を実践しており、今後も参加していただくこととした。

毎回セッション終了後には、参加者に簡単なアンケートを行い、セッションに対する期待や感想などを自由記述で、「安心感」と「居心地」については4件法で確認を行った。

片付けなど終了後学生ボランティアは、その日の活動を記録し、それに基づくフィードバックセッションを行った。

参加者のアンケートと学生の記録は、教員が集約し、学生の活動への関心を維持し、動機付けを高め、利用者や活動に関する申し送りの意味もあり、メールで配信した。

また、教員の関わりとしてはローテーションで交代することを基本としたが、#1においてBが、この日の担当であるaに対して最初から心を開き心情を吐露してきたため、連続性や安心感を維持するために、当面aは継続して大人グループに参加することとした。

また子どもへの関わりについて当初、子どもたちが慣れ、参加者も増えてくれば、子ども同士の遊びの輪が広がることを期待し、子どもたちを1グループとして、グループに複数のボランティアの配置でもよいのではないかとの見方もあった。しかし#2において、兄弟間の葛藤も見られたため、当面は子ども1人に対して学生2人程度を配置することとした。個別のプレイセラピーであれば、このような感情の発散の意味を一緒に考えていくことこそ治療的であるかもしれないが、他児や、他児の保護者である大人が目がすぐ側にあるような構造の中で、無闇に感情の発散をさせることを抱えていけるような枠組みではないことも鑑み、このような方針を立てた。

(利用者アンケートより)

B：前回とても楽しい時間を過ごせたので、都合がつかるときは通い続けたい。

子どもたちのストレスが発散できてよかった。

子どもたちは学校や家庭で発散できないこともたくさんあるので、ここで自分たちの思いを表に出してほしい。( # 2 )

と、スタートとしては利用者の期待に応えることができているのではないかと考えられた。

# 3 ~ # 10 ( 6月18日 ~ 8月8日 )

# 3より、新たにCがメンバーとして加わった。申し込み時点より個人面接を希望していたので、教員cが、ほっとひろば開催時間の一部で並行して、個別に面接を実施することとなった。夫の実家への避難であり、そこでの葛藤や、幼稚園に入園した娘の悩みなどが語られた。その間子ども(以下、娘C)は学生スタッフが担当

した。

最初は分離不安を示したが、比較的短時間で学生にも慣れ、ボールプールのボールを外に投げ出すなどの遊びを続けた。また、大きな布製の積み木を組み合わせた、崩したりといった遊びも繰り返された。

Aの兄弟は、新しいメンバーに興味を示しながらも、それぞれの担当の学生との関わりを続けた。#2でやや感情的・衝動的な面を見せた弟は、その後も些細なことで兄に対してちょっかいを出したり攻撃性を向けたりすることもあったが、#2のような極端な感情の爆発は見られなかった。また、部屋に準備するオモチャも、競争心を刺激するものや、興奮を促すような音響効果のあるものは控えるなど、選別を重ねた。

娘Cは次第に学生との関わりにも慣れ、描画を通しての自己表現もみられた。また個別面接において、母親の住環境にも改善が見られる等の報告があった。娘Cの園での様子は、母親から少しずつ自立できていることを伺わせるような報告がなされた。

大人グループでは、被災者向けの単発の行事なども開催されるが、マスコミの取材などが多く被災者同士がゆっくり話すことができないといった不満や、被災のことは忘れて楽しもうと思って参加したレクリエーション企画であっても、参加した被災者から話しかけられ被災の話になることで、あまり楽しめなかったことなどが語られた。

最初から参加しているBが話題の中心にはなるものの、教員の配慮もあり、比較的全員が参加できるようにファシリテートされた。

(利用者アンケートより)

C：この様な場合は非常に有難い。どうか継続していただけると嬉しいです。( # 4 )

B：子どもたちが毎週楽しみにしているので、学生の方や職員の方と遊んで気晴らしができれば。( # 5 )

C：(子どもが)職員・学生の方に相手してもらって喜んでいたので、こちらは大人だけで話をさせてもらって助かりました。(子どもの)様子の変化してきたことがとても嬉しいです。( # 8 )

子どもたちと大人たちそれぞれが期待を寄せて来ていることが感じられた。

# 11 ~ # 21 ( 8月20日 ~ 10月29日 )

8月は、学校・幼稚園は夏休みであり、被災者もそれぞれの地元に戻る予定があったものの、毎回のアンケートではほっとひろばに対する強い期待も綴られており、お盆期間中を除きできるだけ定期的に開催するよう努めた。

帰省したA兄弟からは、ほっとひろばが楽しくなってきたというコメントの暑中見舞いが届いたり、ほっとひ

ろばに対する肯定的な発言が見られた。

9月17日( # 15)、一度に3組の新規参加者があった。1組(D)は市役所の窓口でリーフレットを手にしたとのことであり、2組はAの紹介(E、F)であった。3組とも子どもを連れての避難であったが、習い事などの関係で、子どもを連れてきたのはDのみであった。

Dは個人面談を希望しており、娘Dの分離不安が強かったが、Dの1回目のセッションでは少しではあったが個別面談の時間がとることができた。しかし、2回目のセッションで個別面接中、母のいないことに気付いた娘Dが泣き出した。ここでは後述する理由で、母親のいるところにDを戻した。

その後娘Dは、なかなか母親から離れることができなかったが、娘Dを大人グループの近くで遊ばせる等によって、Dも、大人グループの中で話に加わることができるようになっていった。次第に娘Dは、Dから離れて遊ぶ時間が長くなってきた。#20(10月22日)で、親グループに参加して話をしていたDに、個別面接を担当していたcが、今娘Dが遊びに夢中になっているようなので、短い時間でも話を伺おうかと提案したところDは、自分の姿が見えなくなるとまた娘Dの不安が再燃し、離れて遊べなくなるかもしれないのでと断った。このときDは、大人グループの中で表情も明るく会話を楽しんで参加できているようであった。

10月8日の#18では、役所の窓口でリーフレットをもらい、Dからも紹介された、とのことで、Gが参加することとなった。

実習などで時間がとれずにいた学生と、10月末(#21)に久しぶりに再会した娘Cが、朝、その学生に対面するやいなや「どうしてずっとお休みしていたの?」と問いかけながら笑顔になった様子から、短期間の関わりではあるが、学生ボランティアの存在が子どもたちの心に着実に内在化されつつあることが感じられた。

6月から10月までの利用実績を表2に示す。

表2 月別参加者実績(6月~10月)

月		6	7	8	9	10	小計
回	数	4	5	3	4	5	21
参加者(のべ)	被災家族(組)	6	9	3	12	20	50
	(内訳)						
	大人	8	10	4	14	21	57
	(人数)						
	子ども	10	14	3	12	17	56
その他	4	3	0	4	3	14	
取材	3	0	1	0	0	4	
	参加者小計	25	27	8	30	41	131
スタッフ	学部生	16	37	9	17	25	104
	院生	3	8	5	16	20	52
	修了生	7	9	1	10	7	34
	教員	12	15	9	13	15	64
	スタッフ小計	38	69	24	56	67	254

(利用者アンケートより)

B: 久しぶりだったので親子共々楽しみにしてきました。週に1回ここに来ることで落ちついた時間を過ごせるので、次回も同じことを期待したいです。( # 13)

E: 初めて参加しました。話をするので気持ちが少し軽くなったような気がします。また来たいです。( # 15)

F: 話を聴いていただき少し楽になりました。また、来たいと思います。( # 15)

C: 個人個人状況は異なりますが、今回の被災で傷ついた人たちが語れるこのような場があるのは、とても心のよりどころになります。( # 16)

E: 今日はお話をさせていただき時間をとっていただきありがとうございました。抱え込んでいたものがあったので、少し心が軽くなりました。( # 17)

F: 市営住宅に移るか迷っていましたが、お話を聞いてもらって楽になりました。親にも言えないことを言えるっていいですね。( # 17)

E: いつも思うのですが、心が落ちつきなごみます。こういう場を提供して下さり感謝いたします。( # 20)

また、Dと話をしていた学生の記録によると(#21) 学生: 「このほっとひろばで自分の時間ができるので嬉しい。」とか、ほっとひろばの環境に慣れないD娘に、はじめはイライラしていたそうです。ですが最近では「(D娘を)変えよう、としていたけど、(D娘の前に)私が変わらなきゃ! って思ったんです!」(中略)(D娘が)慣れるまで近くにしよう、など、D娘を第一に考えるようにしている、という話を伺いました。

と、Dの気持ちの変化が述べられていた。

各自事情は異なるが、ここに来て話をするので何らかの気持ちの整理ができたり、落ち着ける場となることが認識された。

なお、選択式の質問項目によって、毎回全員が高い「満足感」と「安心感」を得ていることが示された。

## 4. 考 察

#1~#21(6月4日~10月29日)までの経過を簡単に振り返った。

本活動は継続中であり詳細に述べることのできない部分は多々あるが、これまでの経過を考察する。

### 1) 臨床心理士が活動することの意味

臨床心理士の業務として、「臨床心理士資格審査規定第4章第11条」において「臨床心理的地域援助」がその

一つとして規定されている。いわゆる個別面接（臨床心理面接）以外の地域における実践も重要な臨床心理士の業務である。そのことをふまえ、本活動を臨床心理士の教員中心で展開していることの意味について考えてみたい。

#1より参加を申し込んでいたBは、ここへのニーズとして心理的な支援というよりは、被災者同士の情報交換を求めているようであった。しかし実際の参加場面では、教員aに対して、佐賀に避難してきた経緯やこちらでの生活について、様々な不満を吐き出すこととなった。これはカウンセリングでカタルシス効果と呼ばれているものであり、本人は意図していないにもかかわらず結果として、カウンセリング的なプロセスが生じており、それによりBも満足を得ていると考えられる。

いくつかの被災者支援プログラムに参加しては、不満を抱き、その不満をほっとひろばで吐露することで、Bの気持ちは整理されていたようだ（#1～#2）。他のプログラムとは違い、ここには来続けているのは、ここが臨床心理士としての姿勢や専門性を基盤にした傾聴や共感の場だからではないだろうか。

またグループセッションのみならず、個別面接を希望される参加者も少なくない。C、Dは継続した面接を希望し、必要に応じてEも、教員cが個別面接を行ってきた。

このように、被災という現実が背景にあり、様々な日常の刺激で不安が引き起こされ易い状態で、カウンセリングを標榜している訳ではなく、グループでの茶話会的な活動を維持しつつも、必要に応じて個別に臨床心理的相談に乗れるという二重の構造が、参加者にとっては安心感をもたらすことになっているのではないだろうか。

9月、10月と、少しずつ新規の参加者があり、これまで1度きりの参加者はいない。参加者が毎回アンケートで常に高い安心感と満足度を残している理由の一つに、臨床心理士としての視点や配慮が挙げられるのではないだろうか。

高松（2004）は、「発起人が、当事者性を持つかどうか」で、サポート・グループとセルフヘルプ・グループを分けている<sup>2)</sup>。前者は当事者性を持たない場合で、後者が発起人が当事者でもある場合である。それに従えばこのグループはサポート・グループである。今回の報告では活動に入る前の準備について字数を割いたが、臨床心理面接においては、面接を始める前にその治療構造をどのように設定するかが重要である<sup>3-5)</sup>。D・W・ウィニコット（1965、他）は抱える環境（居場所）とその中で成長する子ども（クライアント）のモデルを提唱したが<sup>6)</sup>、環境を壊され、安心して生活できる場を奪われた被災者が安心して集う場（環境）を提供するためには、臨床心理学における治療構造の視点は重要であろう。そ

の面でも、当事者ではないが、臨床心理的視点から環境を設定し、サポート・グループのファシリテーターの役割を臨床心理士がとることの意味は小さくないだろう。

## 2) 子どもグループの活動について

この活動では、大人グループと並行して、子どもたちのグループを実施した。それは、開催方針のところでも述べたように、多くの避難者が子ども連れであり、逆に言えば、子どものことを考えての転居ケースが多いのではないかと予想したからである。

子どもたちは被災によって、自分の慣れ親しんだ土地を離れるという分離を体験している。神田橋（2007）は、最も多く幼児期の外傷体験を引き起こすのは「引っ越し」であると述べている<sup>7)</sup>。それほど子どもたちにとって生活環境の一変は、存在の基盤を根こそぎ奪われる不安につながり易いのかも知れない。計画的な転居ではなく、大震災で、不意に、一瞬にして居場所を失ったのであればなおさらであろう。

その中で、娘Dが個別面接を求める保護者からの分離を恐れたのは、予想されることであった。ここで無理矢理母子を引き離すことは、娘Dにとって分離の再体験であり、より頑なに心を閉ざすことにもつながりかねないと判断したため、母親の期待には十分応えることはできなかったが、個別面接に割って入るような形で早期に母親の元に戻すことにした。その後母親の個別面接は実施されていないが、一方で、#20のやりとりや、#21の学生の記録に見られるように、親グループの中で話をすることでDも気持ちの変化が生じ、満足感につながっている。

分離による外傷の再体験を避けるため、母子並行面接のような設定をとらず、親からは子どもたちの活動が見え、子どもたちからも親の存在が確認できるような緩やかな境界を設定するとどめたことで、親・子共に安心してこの場を利用することができているのではないだろうか。

## 3) 学生ボランティアについて

今回の活動は開始前から、学生ボランティアが大きな役割を果たしている。教員にとっても初めての活動であるが、その意を汲み積極的に活動を展開している。

普段使用しない教室を会場として使用するために必要とされる、毎回のセッティングや後片付けは言うに及ばず、子どもグループにおいても、その対象として子どもたちの心には深く刻み込まれつつあるようである（暑中見舞いや、#21など）。

子どもグループにおいては、子ども1人につき2人の担当制にしたことで、子どもたちの行動を受け止める余

裕が広がったようだ。

# 2 でやや衝動的な感情の発散が見られた B 弟に関しても、その後もずっと複数で担当したことで、学生も余裕を持ち、そのことが、その後の活動の安定化につながったのではないかと。また娘 C のボールなどを投げ散らかす遊びについては、担当を複数つけたことでそれをあの場で抱えることができたと同時に、娘 C も安心して表現できることにつながったのではないだろうか。

一方、これは学生にとってもかなりの負担であり、ローテーションを考えると 1 人でも多い人数が期待された。しかし、ボランティアとは言っても被災者と直接関わりを持つことになり、B 弟や娘 C、娘 D の様な、何らかの不安を抱えた子どもたちとその保護者と関わるのが、ある程度予見できたので、公募はしなかった。

このような子どもたちや保護者に対して最低限の責任ある関わりができる学生でなければ、子どもたちや保護者も安心してこの場を利用することはできなかつたであろうことを考えると、ここまで活動が継続でき参加者も増えていることは、選抜された学生の質が十分に担保されていたことを意味するのではないだろうか。また、学生が複数で 1 人の子どもを担当することで、それを見ている親にとっても、子どもを任せて親グループで話せる安心感につながり、継続した参加につながっているように思う。今回は一部しか紹介していないが、毎回のアンケートの記述にもよく表されている ( B # 5、C # 8 など )。尚今回報告した時期の特に後半 9 月 ~ 10 月にかけては、大学院生の参加も徐々に増えてきたが、大学院生が即戦力として子どもの遊び相手などを務めていることはいままでのない。以上のように、今回の活動においては選抜された学生ボランティアが多大な役割を果たしている。

#### 4) 裏方の役割について

今回の活動において、裏方が果たしている役割も小さくない。修了生は教員を除くメンバーの中ではもっとも臨床経験が豊富なので、子どもたちを直接担当することも考えられた。しかし、むしろ背景から鳥瞰的視野で場全体を見渡して、必要な介入をする役割を担った。むしろそのことで、教員が親グループや子どもグループに安心して介入することができた。この活動の中にある二重三重のセーフティーネットの最後の“砦”と言える。この機能は、臨床現場で培われた判断力やマネジメント能力が存分に発揮されなければならない。単なる事務的な処理ではなく、場面に応じて、利用者(大人 - 子ども) やそこに関わる教員、学生ボランティアらが何を必要としているのかを読み取り、適切なツールを提供する臨床心理的読み取り - 対処能力があつてこそ、この裏方を冷静にこなしていくことができるように思われる。

また、教員と学部ボランティアのつなぎ役として橋渡しする重要な機能も、修了生が担っている。つまり、単に裏方が大きな役割を果たしているだけでなく、全体の潤滑油や接着剤として、活動を支えていると言える。そのお陰で、「教員 - 学生ボランティア - 裏方」が三位一体となって、有機的に連携することができている。そのような仕組みの中で会全体が支えられているからこそ、活動がここまで継続し、一度参加した利用者は安心して、必ず繰り返し参加しているのではないだろうか。

このように、今回のこのほっとひろばの安定と継続において、裏方の存在は大きい。今後もこのような介入が必要とされる際には、利用者に直接関わるスタッフだけではなく、環境を二重三重に抱え、チェックをしていくようなスタッフ構成が、安心できる、居心地のよい居場所を提供する上で一つのモデルとなるのではないだろうか。

## 5. おわりに

今回、平成 23 年 6 月より発足した「ほっと広場西九大」について、同年 10 月末までの活動を報告した。

この活動は 10 月末現在で継続中であり、参加者も漸増中である。今後いつまでこの活動を継続するかは未定であり、また今後どのようなニーズが参加者より寄せられるか、予想できないところもある。

途中経過ということもありまとまらない部分も多くある。また本来冷静に反省すべき点が多々あると思われるが、今回は取り急ぎこれまでの段階で比較的うまく行っていると思われる点について考察した。それに対して利用者の変化やニーズについての考察は不十分である。今後この活動を展開・継続していく中で利用者の変化や、効果として注目されるべき点については、後日改めて報告させていただきたい。

#### 付記

これまでほっとひろば西九大にご参加いただき、本論文を発表するに当たって、快くご了承いただいた参加者の皆様に、心より感謝申し上げます。

#### 引用・参考文献

- 1) 松崎佳子 (2011): 被災地からの転入者への支援  
臨床心理学, 11(4), 577
- 2) 高松里 (2004): セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド 金剛出版
- 3) 渡辺雄三 (1995): 夢分析による心理療法 金剛出版
- 4) 松木邦弘 (2005): 私説 対象関係論的心理療法入

門 金剛出版

- 5 ) 妙木浩之 (2010): 初回面接入門 岩崎学術出版
- 6 ) D.W.Winnicott (1965): The Maturation Processes and the Facilitating Environment.  
牛島定信 (訳) (1977): 情緒発達の世界分析理論  
岩崎学術出版
- 7 ) 神田橋條治 (2007): PTSD の治療 臨床精神医学 ,  
36(4) , 417-433